Miyazaki Women's Junior College

宮崎市の神楽の音楽

―生目神楽の場合―

黒　木　亜美子

The Music of Kagura in City Miyazaki

— A Case of Ikime Kagura —

Amiko Kuroki

(Receivcd Sep. 30, 1983)

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

1. はじめに

本論における神楽とは、いわゆる宮中における御神楽と区別されて里神楽と総称されている民俗芸能の神楽を指す。この神楽については、その語源や分類等については諸説があり未だに確定されていないが、一般には、神楽とは「神座（カムクラ）」の約言で神を降ろす場を示し、その前で奉納される芸能であり、①巫女神楽　②出雲流神楽　③伊勢流神楽　④獅子神楽　に分類される[注1)]、というのが定説とされているようである。

この神楽には、笛や太鼓・銅拍子等による囃子と、舞人や太鼓奏者が歌う神歌や、地方によっては見物人が神楽をはやして歌う「せり唄」の類といった音楽的要素が不可決である。この、神楽の音楽的要素をフィールドワークによる採集結果をもとに、テトラコルドとリズム型について分析した後、その音楽の特徴が意味することについて考察を加えていきたい。

今回は、昭和58年３月13日に宮崎市の生目神社で奉納された生目神楽の取材を中心とした調査結果を報告するものである。しかしながら、後述する通り、この日奉納された神楽は一部であり、かつ、文書資料が、過去に焼失していることや、インタビューに十分答を用意できたであろう古老たちは既に亡く、宮崎市吉村町在住の郡司英三郎氏（89歳）と、祭場に奉仕していた人々へのインタビューに頼るのみであったので、生目神楽の全貌を伝えるには不十分なものとなっている。

今後は、旧生目村の他神社に伝わる神楽の取材も含む生目神楽の再取材を中心に、宮崎市内の神楽の音楽の特徴にどれだけの異同があり、それがいかなる原因によって生じたものかという点を中心に研究を進めて行く予定である。

2. 宮崎の神楽

民族学研究の盛んな今日、前述の４つに分類された神楽のうちの出雲流神楽に分類されるという、宮崎県北部の高千穂神楽と呼ばれる一連の岩戸開きを中心とした神楽は、研究者の間のみならず観光資源としても全国的に有名になっている。また、いわゆる山間部の狩猟、焼畑風俗を反映した古型を残すと言われる椎葉神楽や米良神楽も最近では脚光を浴びてきている。また、県内では他に児湯郡高鍋町の高鍋神楽や、西諸県郡高原町に伝わる神舞及び祓川神楽なども比較的良く知られている。

しかし、この他にも県南沿岸部に伝えられている大漁祈願の神楽や、宮崎市内の各所に残っている神楽等、比較的知られていないものも多数存在している。例を挙げれば、宮崎市内には旧生目村の各地区や、生目地区よりやや下流の天満宮、大淀川を渡って反対岸の下北方地区、また、少し離れて吉村町八幡神社、及びその北側の村角地区等に、一時すたれたり復興したりしながら一連の神楽が各々存在し、そのほとんどが２～４月にかけて舞われる春神

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

楽である。

こういった神楽の中には不完全に伝承されているものが少なからず存在するが、これは、伝統芸能一般によく見かけられる後継者難もさることながら、一般の人々の関心の低さも原げられよう。即ち、神楽は祭の一部或いは祭そのものであるが、地元民ですらその存在を知因の一つに挙げられよう。即ち、神楽は祭の一部或いは祭そのものであるが、地元民ですらその存在を知らぬ者が増え、(戦後特に著しい住民の異動により)祭の場に人が集まらなくなってきている為に伝承意欲がそがれていたのではなかろうか。

存在している。

これは、神楽を伝承する人々自体には、非常に自分たちの神楽に対する誇りが強く感じられるのであるが、その周囲で神楽を盛り立てて行き、伝統芸能として自らのものを後世に伝える環境を作るべき人々において、神楽といえるものは高千穂にしか存在しない、という、一種の思い込みが感じられる。必ずしもそうとは言い切れないであろうが、私が取材にあたって、某市より、(確かに神楽が存在していたのだが)〝当地には神楽は存在しない、取材したければ高千穂に行かれよ〟との返事を受けたことは事実であるし、「うちのは高千穂のほど立派ではない」という旨の声を再三耳にしてきた。これは、とりもなおさず高千穂神楽の存在がいかに強い影響を与えているかを示すことにもなり、各々の神楽が高千穂からの流れを汲むという推論の根拠ともなり得るかもしれないが、取材する側にとっては、「高千穂のを見なさい」の一言でインタビュー終り、とされることになりかねず、事実、何度かその経験があるのだが、本来のその土地に伝わる神楽の伝承に関しては、はなはだ危険な考え方であり、実際に高千穂から伝承されたにしても、全く同じに伝わっていることはむしろ少なく、その地独特の variation が生じるはずである。

高千穂の方々には大変失礼であるが、特に保存会や行政サイドの〜課といった人々に多く見られるこの思いこみが一因となって、その土地古来の神楽伝承に影響を与えることのないよう願うものである。

いささか極論に走ってしまったが、神楽についての諸研究は、やはり高千穂関係のものが圧倒的に多い。[注2] 宮崎市の神楽について述べられているものは、私の知っている範囲では生目神楽について触れてある「生目郷土史」(昭和53年1978年、生目地区振興会発行)のみで、その他は地元新聞に祭の翌日に掲載されたものぐらいであろう。また、その音楽的要素については何ら述べられていない。したがって、研究方法は現場取材と地元の人へのインタビューを主体とすることになろう。

3. 生目の歴史

この部分の記述は、もっぱら、前述の「生目郷土史」により、その他宮崎県及び宮崎市の

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

歴史について述べた文献をも参照した。（cf・参考文献目録）

現在、生目と呼ばれている地区は宮崎市大字生目のことで、生目神社はこの地区にあるのだが、従来しばしば混同されてきたように、宮崎市合併（昭和38年）以前の旧生目村全体を指す場合もある。「生目郷土史」は、この旧生目村全体史であるので、ここではそれに従うものとする。（地図1 参照）

さて、生目には、跡江地区に貝塚が残されており、古くから人が住んでいたことが証明されている。同じ跡江地区には古墳時代前期の古墳群があり、勢力を持つ豪族が住んでいたことが知られる。

ところで、この古墳が作られる以前の景行天皇の13年（西暦83年）に、天皇が熊襲征伐に下られた折にこの地に立ち寄られた際に「いきめ」の名の由来が伝えられている。

〝景行13年7月1日、天皇は高屋ノ宮行在所をいでて道を西にこの日がちょうど御父活目入彦五十狭茅尊（垂仁天皇）のご命日に当るので、祭の場を求められていた。そしてこの地を佳き地と定められ祭の庭を設けて、いと厳粛にその祭儀を終られたのである。以来この一帯を活目といい、後、生目と言うようになった〟

この、「いくめ或いはいきめ」の地名には他に二説ほどある。即ち、〝この地は古くから眼疾患者を活かすに著しき霊験があった。それにより古人はここに生目八幡宮を称え奉った〟いま一つは、鎌倉時代にまで下るのであるが、平景清公が頼朝討伐に失敗して日向に下向し、現在の下北方の地に庵を結んだが、鎌倉の世を見るに忍びず自ら両眼をえぐって投げると、この地の松にかかり（眼掛けの松）、公の没後も活けるが如き霊眼を斉き祀ったという。

ここに〝目の神様 生目神社〟の信仰を長きに渡り保っていると言う。

いずれも伝説として残されているのだが、生目の名が古くから伝えられ、また生目神社が目の神として祭られてきたことを示すものである。その後旧生目村の地名が現れるのは、平景清が在世の頃、伊東氏の一族が日向国地頭に任じられた折の建久図田帳撰の中で、（1198年）浮田の荘、細江別府、長嶺別府の地名が見られる。時代をさらに下ると、1300～1400年代にかけて跡江や細江に城があり、それが攻防の対照となったようだ。さらに下って1541年長嶺の長倉能登守が伊東義祐と戦ったことで、再びこの地がクローズアップされる。さらに下って天正19年（1591年）、大閤検地による日向五郡分帳撰の中に初めて浮田・柏原・細江・長嶺・跡江・富吉・有田・小松の名称が出揃い、これが後の生目村誕生の際の各地名とほぼ一致する。

そして、1888年（明治21年）に至り、旧生目八ケ村（前述の浮田村が生目村との二つに別れ、有田村は、諸県郡倉岡郷の一部とされた）の形ができ上り、生目村議会を持つようになった。

昭和に入ってから、1962年（昭和37年）に宮崎市との合併促進委員会が設置され、翌1963年（昭和38年）4月1日付で宮崎市と合併し、それぞれ宮崎市大字生目、大字浮田のように

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

呼ばれるようになった。

以上、概略史を述べたが、この間生目村を統括した人々は、しばしば変っており、はじめ国司であったのが鎌倉時代には地頭になったり、江戸時代では幕府天領となったり、延岡城主の代官であったりした為、彼らのそれぞれの影響力の大きさや、税制の都合により八ケ所細かく分けられたり、一定のグループにまとめられたり、生目と総称されたりしたこともあったであろう。

4. 生目神社

こうした歴史の中で、常に村の中心でもあったであろう生目神社は、その創建に関しては不祥であるが、「宇佐大鑑」には天喜4年（1056年）に、既に生目八幡神社が建立されてあったと記され、また、弘治2年（1556年）には既に多くの社領神田を有していたと言う。

また、元禄2年（1689年）に豊後国日田の郡代池田季隆が参拝して献詠した「かげ清く照らす生目の鏡山　末の世までも雲らざりけり」とあるを、神示によって、「かげ清く　照らす生目の　水鏡　末の世までも　雲らざりけり」と改めてご神詠となしたとされている。

祭神は品陀別尊（応神天皇）、藤原景清霊神であり、相殿祭神は瓊瓊杵尊、彦火々出見尊、鵜茅葺不敢命、活目入彦五十狭茅尊である。

境内末社に八阪神社（南）と若宮神社（北）があり、現在の社殿は、本殿が文政10年（1827年）に、拝殿は昭和9年に造営したものである。

旧暦正月の十五日から十七日の三日間は縁日祭が最大のにぎわいを見せ遠来の参詣人が、御供の御神水を目洗水として授かりに集うという。また、3月15日前後の土・日曜日には里神楽祭として、日中より夜9～10時ぐらいまで神楽が奉納されて豊作を祈願し、11月23日の新嘗祭には収穫を感謝して秋の産物を神前に供えて品評会を催した後、一般にせり売りしてさばき、売上げを御初穂料としている。

他に毎月の一日と十五日が月並祭とされ、以前は毎回5番ほど神楽が舞われており、「御酒舞」「方社」「花舞」の、三つの清めの舞が必ず含まれていたと言う。（郡司氏談）

5. 生目神楽

① 神楽の由来

生目神社の神楽がいつ頃から行われていたかについては、はっきりしない。

どの神楽にも言われているように、神代の天岩戸開き以来との説もあれば、生目神社が建立された時から、との話もあるが、いずれも伝説の中であるので詳らかではない。また、70～80年前に高千穂より神楽を伝え持ってきて舞うようになったとのことも伝え聞くようであ

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

るが、これは、郡司英三郎氏によると、以前は小松や跡江の神楽の舞子が来て奉納していた時期があったが、郡司氏が小学生の頃、村角（ムラズミ）（地図２　参照）の神楽の師匠に伝授してもらって、生目神社の礼人のみで奉納するようになったことを指すのであろう、とのことであった。

②　神楽の運営

先にも述べたように、毎年３月15日（新暦）前後の土曜か日曜に、大体午後３時ぐらいから９～10時ぐらいまで行われる。以前は３月15日と決まっていたそうだが、最近になって舞手の都合と見物人の数を考慮して土、日曜に随時動かすようになったと言う。

主に舞人と地区の年寄が中心となって運営されているが、初めに述べた通り、次第に詳しい古老が相次いで亡くなられた為、神楽について、その運営等に詳しい人がほとんどいないことや、舞手の都合等もあり、毎年同じものが同じ順で奉納されるわけではないと言う。

祭場（写真１　参照）は前日に拝殿に向って右側の庭に前日に設営され、（写真２参照）中央正面の３本の注連は当日氏子たちによって建てられる。[注4)]

この春神楽で、その年の五穀豊穣を祈願し、また、厄年の者には厄除けとするのである。

舞人は、以前は礼人（れいじん）と呼ばれる資格をもつ人のみだったようであるが、現在では氏子の小・中学生を含めて、特に舞人の資格というものもなく、勤め人や子どもも多い関係で、１番50分で一晩かかるものを、前に述べた如く半日で済ませていると言い、また、舞の番付も各自の都合により適宜変えているとのことだ。

また、以前は、特に剣舞を舞う者などは、各自一週間程度、何らかの精進をして潔めた為に怪我をすることはなかったと言うが、現在ではほとんど行われていないようだ。

③　神楽の構成

生目神楽も、もとは33番揃って奉納されていたと言う。その際の番付表があるので、後頁に掲げておく。(table)

この番付表を見てもわかる通り、潔めの舞（含・剣舞）・鬼神舞、そして狂言的なやりとりを含むものに併せての豊作祈願舞に大きく分けられよう。これらの中の着面のものの中に、岩戸開きの神話（７の氏舞、17の柴引きを表わす太玉、27の柴荒神、31の闢開）や、出雲神話（16の三笠荒神、25の七鬼神、28の蛇切り）が取り入れてあるが、生目神社の祭神が神楽の中に現れることがないのは極めて興味深い。

他のものを見てみると、潔めの舞はほとんどが直面である。[注5)]（１…御酒舞、３…一人剣、５…二人剣、８…三人剣、15…二刀、17…将軍、18…なぎなた舞）

狂言式のやりとりを含んで豊作祈願が行われる祝儀舞のパターンのものには、６の金山、７の氏舞、12…陰陽、27…杵舞、29…田植舞、32…田の神などが含まれよう。

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

その他、鎮護の舞や、諸々の安全祈願の舞等が組み込まれているが、全体を見ると、初めと終りの潔めの舞及び、終了前の岩戸開き後の喜びの舞以外は、番付の順に必然的な一貫性はなく、文字通り諸祈願の為に祭の場を設けて神人共に楽しんだ風がうかがわれるが、[主6)] 鬼神の舞や、物真似、こっけいなやりとり等、何か中世の猿楽・狂言をほうふつとさせるものも感じ取れる。

④ **神楽の舞**

一見して断言できることであるが、生目神楽の舞いぶりは、非常に激しいものである。男性的な荒々しい舞なのであるから、若手から中堅が舞うものが（体力を必要とするものが）多くなっている。特に、剣舞やなぎなた舞、弓矢舞などではアクロバティックに剣を回したりくぐったりと、文字通り跳んだりはねたり、前転したり、と、絶えず激しく動き回らねばならず、疲労が激しいと言う。のみならず、鬼神舞などでも、体の浮き沈みが激しい。

たいてい鬼神を舞うのはベテランなのだそうだが、腰を深く落して浮び上がらせる体さばきと足のあがり方で、舞の習熟度がわかると言う。

こういった、独特の舞いぶりは太鼓に合っておらねばならず、従って、太鼓のリズムに生目神楽の特徴が現われてくるわけである。

6. 生目神楽の音楽

はじめに述べたように、神楽の音楽としては、囃子と神歌、せり唄を考えるとしたが、生目神楽の場合、せり唄の類は存在しないので省略する。

また、神歌も、ほとんどが単調なのりとであり、音階を構成するだけの要素を満たすものは一曲のみであったので、次回の取材報告に回したい。

囃子については、以前は太鼓に銅拍子と笛が三つとも揃ったものが全ての舞についていたそうだが、笛は、一つの短い曲が三つの舞（氏舞型に二つ・鬼神舞型に一つ）に一部分についていただけであり、銅拍子は使われていなかったので、今回は考察対象より外す。

従って、本論における音楽的特徴は、もっぱら太鼓のリズム型について述べるものとする。

まず、楽器についてであるが、生目神楽の囃子には大型の締め太鼓が使われていることが特筆されるべきであろう。普通に太鼓というと、日本音楽の場合は大型の鋲打ち太鼓か小型の締め太鼓が連想されるのであるが、大型の締め太鼓はどちらかと言うと、鋲打ちの大太鼓よりは古い起源であることが言われてきている。

生目神楽で、その締め太鼓が使われていることは、同神楽の由来を考える上で、あるいは時代をさかのぼることもあり得るであろう。

太鼓の皮は馬の皮でできており、直径60㎝内外で、ふだんはヒモをゆるめて皮をたるませ

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

ておき、囃子に使う時に皮を締めるという。バチは、丁度、菓子やうどんの生地を伸ばす時に使うメン棒ぐらいの太さと長さで、やや握り手側が細くなっている。

この太いバチで、太鼓の皮が破れる程にたたくそうで、このことからも、舞の激しさと密接な関係にあることがうかがわれる。また、演奏中に皮がたるんでくることもある為、途中で、他のバチを使って締めヒモをきつくしている光景が見られた。

太鼓上手がたたくと、太鼓がものを言うそうで、たたいた後のひっぱりと手首の柔らかさで巧拙が決まるのであり、下手がすると舞が舞えないと言う。また、当然のことかもしれないが、太鼓打ちは舞のことをよく知っておらねばならず、また、舞手は太鼓をたたけねばならないそうだ。今回は、太鼓専門の人と、舞も太鼓も両方兼任した人とが居た。また、一人でいくつもの舞を舞える人は太鼓の習熟度も違うとのことである。

祭当日に太鼓専門の人にインタビューしたところ、上記のような答が帰ってきたが、また、生目の太鼓は非常に難しいとの話もあった。

神楽の太鼓は、大体が（他所も含めてか？）3調子、5調子、7調子とあり、生目のものや小松、大塚のものは一番難しい7調子であるそうだ。特に氏舞となぎなた舞の初めの部分が難しい為、ベテランがたたくことになっているという。

生目神楽の太鼓のリズムパターンは、大別して、「氏舞型」「鬼神型」「剣舞型」の三通りになるように思われる。

いずれも共通していることは、付点つきのリズムが非常に目立ち、かつ、その付点が長く引っぱられる傾向が見られる。

また、三連符の系統が多く存在し、一層リズムを複雑にしている。

その上、強弱の変化が非常に極端で、それらのことは全て舞いぶりと密接に関係していることが言えよう。

即ち、背のびをしたり、深く体を沈める動作の次に移る場合は、付点で音価を伸ばしたリズムが必要であろうし、日本舞踊などとは程遠い舞いぶりに、従来強弱感の弱い2拍子の日本音楽と言われてきたことが必ずしもあてはまらないことは、うなづけよう。

7. おわりに

以上、生目神楽について、つたない論を展開してきたが、これだけでは非常に不完全なものであることは言うまでもない。

はじめに述べた通り、まだ多くの取材が必要とされるであろうし、他地区との比較・検討により新たなものが生じる可能性もある。最終的には、宮崎市の神楽として全体を仕上げて行き、前回の「米良神楽の音楽」（宮崎女子短期大学研究紀要　第9集掲載）につながる可能性をも含んでいくのではないかと、漠としているが、本論を書き終えた時点で感じている

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

ところである。最後に協力していただいた方々に深く感謝し、お礼を申し上げたい。

注１）

本田安次：「神楽」、東京・木耳社、昭和41年（1966）、「神楽」，東京・平凡社、昭和44年（1969）ＰＰ.59～116（日本の古典芸能１）より、〝「神座」とは特定のものを指すのではなく、ただ神の宿るところと考え、「かぐら」は、その神の座を設けて人々が集まり、その前で行われた祈祷、即ち祭そのものを古くは指したのであろう、

〝①巫女神楽とは、祭の庭の巫女の神懸りの舞が取り出されて一つの洗練を経たもの ②出雲流神楽とは、出雲の佐陀大社に行われた神事に範をとるもので、採物の舞を主とし、それに能が合わせ行われているもの ③伊勢流神楽とは、明治維新まで伊勢の外宮の神楽役のものたちが行っていた神事の脈を引くもので、その中心は湯立による清めにある。湯立神楽・お潔め祭・霜月神楽などとも呼ばれるもの ④獅子神楽とは、獅子を権現とあがめ、獅子によって祈祷をし、その余興に古風な能や散楽などを行う形をとっているもので山伏神楽と太神楽とがある。〟

注２）

小手川善次郎：「高千穂神楽」「高千穂の神楽唱教について」（昭和31年）1956年

小寺融吉：「高千穂神楽」（『旅と伝説』13－５・６）

倉林正次：「高千穂神楽」（『芸能復興』11・12合併号）

田中熊雄：「銀鏡神社の神楽」（『まつり』３）

富高武雄：「日向の高千穂神楽」（『旅と伝説』15－７）

楢木範行：「椎葉紀行」（『旅と伝説』６－８）

松本友紀：「高千穂の夜神楽」（『日向郷土史資料』１－１）

宮崎県教育委員会：「日向の民族芸能第１輯」（昭和34年）1959年　　等々多数の文献あり。

注３）

初代工藤（伊東）祐経より伊東祐時以下伊東氏33代。

注４）

この注連の体裁は米良神楽のものと酷似している。しかし注連の３本立は米良地区でも西米良村小川の米良神社にのみ見うけられる。また、高千穂や米良などに共通して見られる、注連縄につるされる種々の特徴ある紙飾りは、ここでは全く見られない。

注５）

魔よけの舞も潔めの舞に含むものとする。古来、剣や弓矢などで魔除けをし、その場を潔めることば神楽の中でなくとも行われてきた、よく知られた習俗であろう。

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

注６）

他地方では、先祖の遺徳を思い出させる物語が組み込まれていたり、大和朝廷の日本統一物語が組み込まれていたり、また岩戸開きを順序立てて演じたりする為、神楽を舞う順序には一定のルールが存在するものが多い。また、直面の潔め舞が着面の神を導き出す型も多く存在している。

参　考　文　献

生目地区振興会：生目郷土史，文化印刷，昭和53年（1978）

石塚尊俊：西日本諸神楽の研究，慶友社，昭和54年（1979）

石上　堅：日本民俗語大辞典，桜楓社，昭和58年（1983）

大間知篤三他編：民俗の事典，岩崎美術社，昭和47年（1972）

芸能史研究会編：神楽（日本の古典芸能１）平凡社，昭和44年（1969）

五来　重：修験道入門，角川書店，昭和55年（1980）

小島美子：囃子と楽器，三隅治雄編：民俗芸能，學藝書林，昭和44年（1964）
ＰＰ.144～170（伝統と現代７）

豊田　武他編：流域をたどる歴史７＜九州編＞ぎょうせい，昭和54年（1979）

比江島重孝・竹崎有斐：宮崎の伝説，日本の伝説31，角川書店，昭和54年（1979）

日高　次吉：宮崎県の歴史，県史シリーズ45，山川出版社，昭和45年（1970）

宮崎県芸術文化団体連合会：宮崎県文化年鑑　1980，宮崎県芸術文化団体連合会
昭和55年（1980）

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

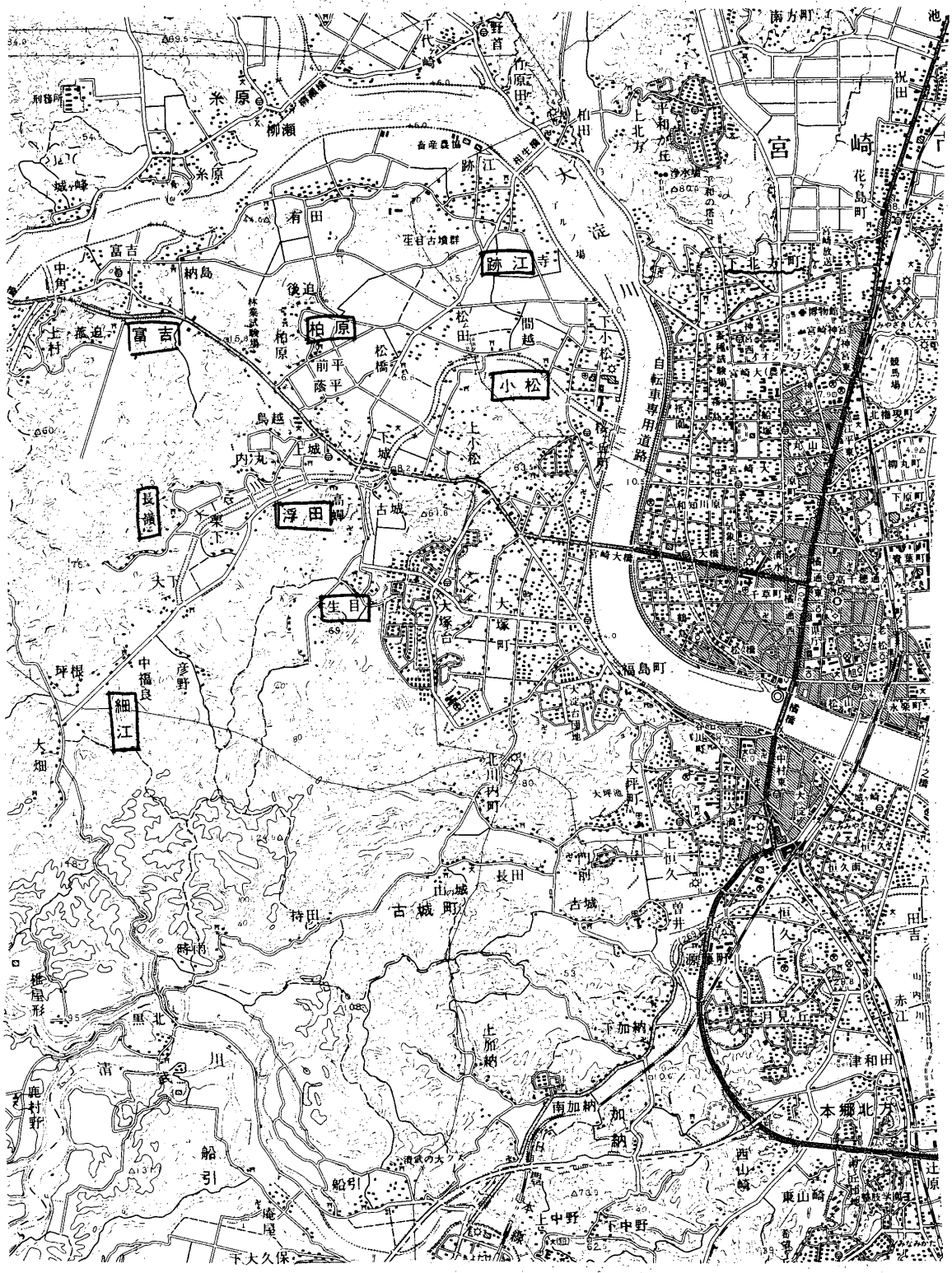
Table　　生目神楽番付表

1	御酒舞(みき まい)	直面・神楽はじめの舞で、お神酒を捧げて四方を祓う。
2	鬼神(き じん)	着面・鬼神の舞いはじめ。
3	一人剣	直面・剣の舞いはじめ。
4	三笠	着面・頭と両手に笠を持っての勇壮な舞
5	二人剣	直面・二人で舞う剣舞い。
6	金山(かな やま)	着面・笑いの面、調子に合せて方々に出回る舞
7	氏舞(うじ まい)	〃・面はウズメノミコト、嫁女面ともいわれる舞
8	三人剣	三人で舞う三番目の剣舞（直面）
9	方社(ほう しゃ)	着面・13番まで一連の舞、神しづまりの舞で鎮守ともいう。
10	里人	着面・住いの安全を祈る舞
11	稲荷山	〃・山を守り風難よけの舞
12	陰陽	〃・天地，昼夜，日月，男女の舞
13	神武	〃・２人舞、すめらみ国ご安泰の舞
14	太鼓舞	〃・神と人の共感をあらわす舞
15	二刀(に とう)	左手に２本の抜刀をかざして舞う魔よけの舞（直面）
16	三笠荒神(み かさ こう じん)	着面・鬼神は建御雷神(たけみかづちのかみ)で猛々しい舞
17	将軍	直面・２人舞　弓矢にて悪魔を払う。弓正護ともいう。
18	薙刀舞(なぎ なた)	直面・１人舞　ナギナタにて魔を払う。
19	太玉(ふと だま)	手力男命　根こじの柴引きの舞（着面）
20	岩通し	３人、３本の剣の輪を交互にくぐって舞い返す（直面）
21	杉登(すぎ のぼり)	２人直面　住いづくりの舞
22	地割(ぢ わり)	１人着面　土地を区切る舞、屋敷のしづめ
23	四人剣	４人直面　４人神示(よったりかんじ)ともいう。剣で四方鎮護する神々の舞
24	花舞	２人直面　重箱を持って豊年を祈る舞
25	七鬼神	７人着面　大国主命の御子７人の舞
26	柴荒神	１人　〃　岩戸前柴立てかざる舞
27	杵舞(きね まい)	５人直面　豊年祝のもちつき舞　うち一人は女装
28	蛇切り	４人　〃　スサノオノミコトのオロチ退治、綱の問答がある。
29	田植舞	２人　〃　ご幣を苗として田植の所作をする舞
30	繰下し(くり おろ)	２人　〃　立てられた注連から縄をひく注連倒しの神楽
31	闢開(びゃく かい)	１人着面　岩戸が開き、喜びの舞
32	田ノ神	２人　〃　田の神と神主の問答　農耕、国産みのことを教える。
33	神送り	１人直面　神々を送る舞

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

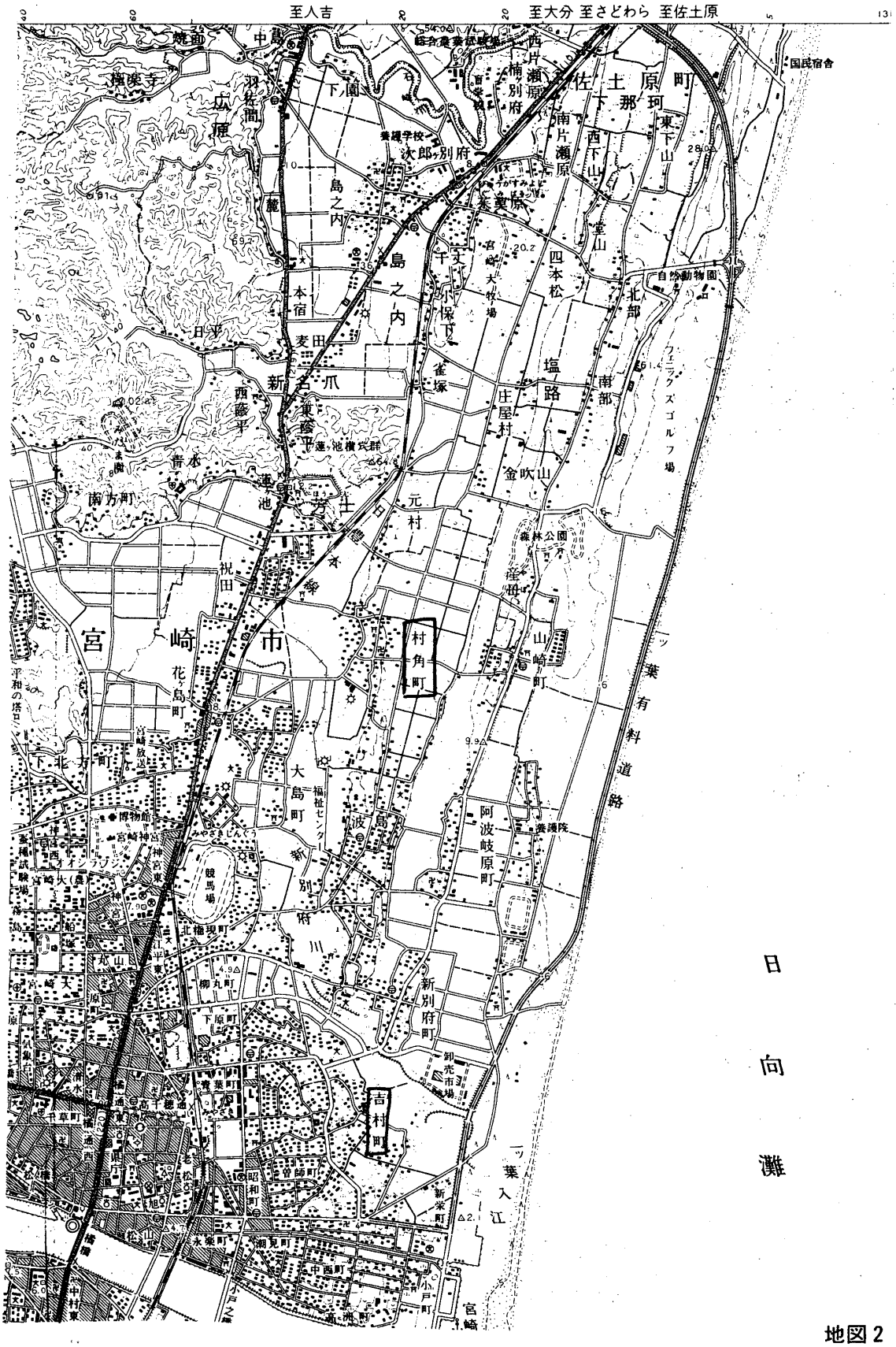
〔旧生目村とその周辺〕



地図１

NII-Electronic Library Service

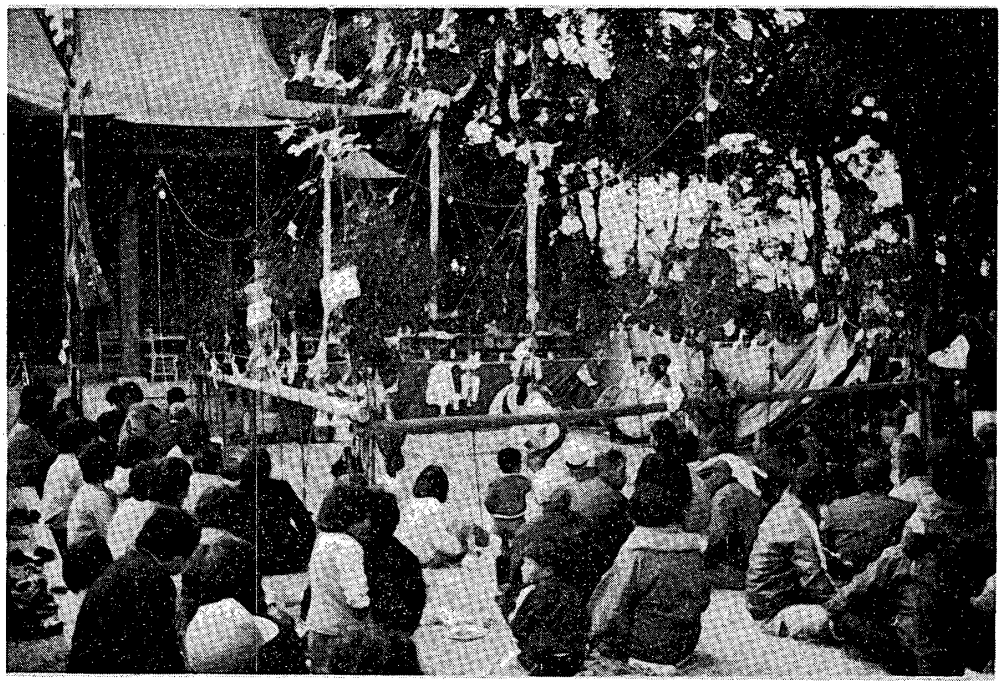
〔村角町と吉村町〕



地図 2

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College



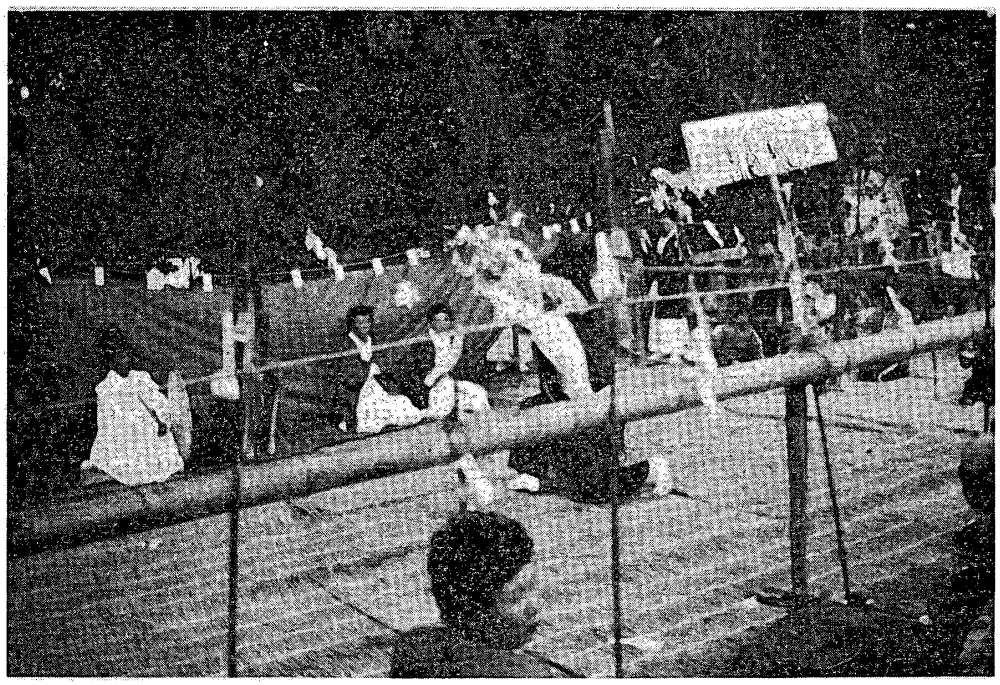
（写真１）　生目の神楽祭場

生目神社拝殿と神楽祭場（写真２）

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

〔荒ぶる神の舞～鬼神さまざま〕



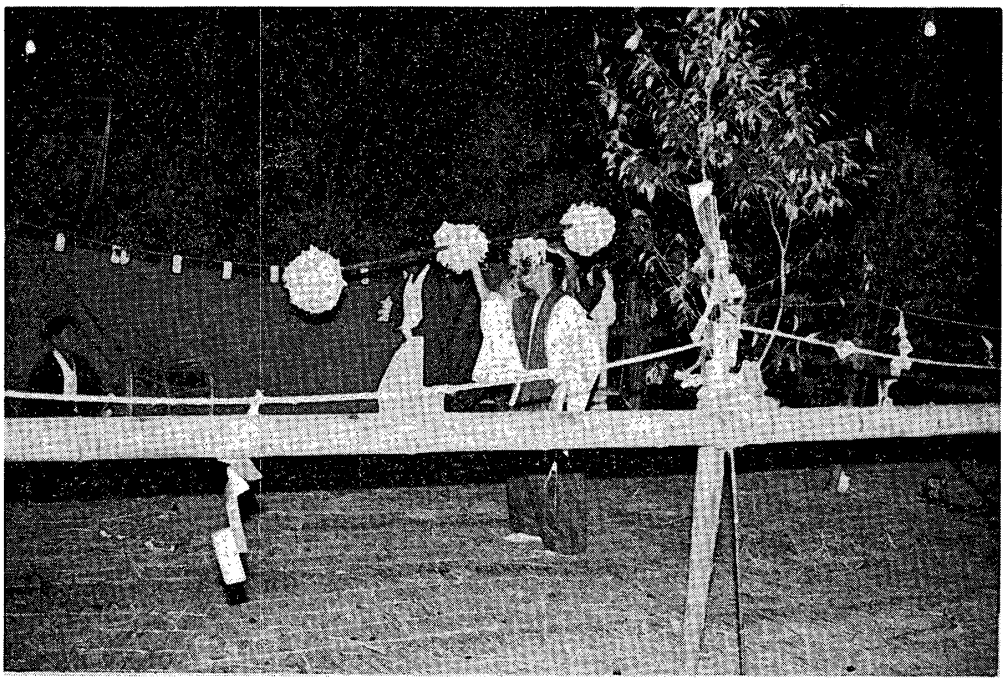
採物：花カゴ　（写真３）

採物：面棒

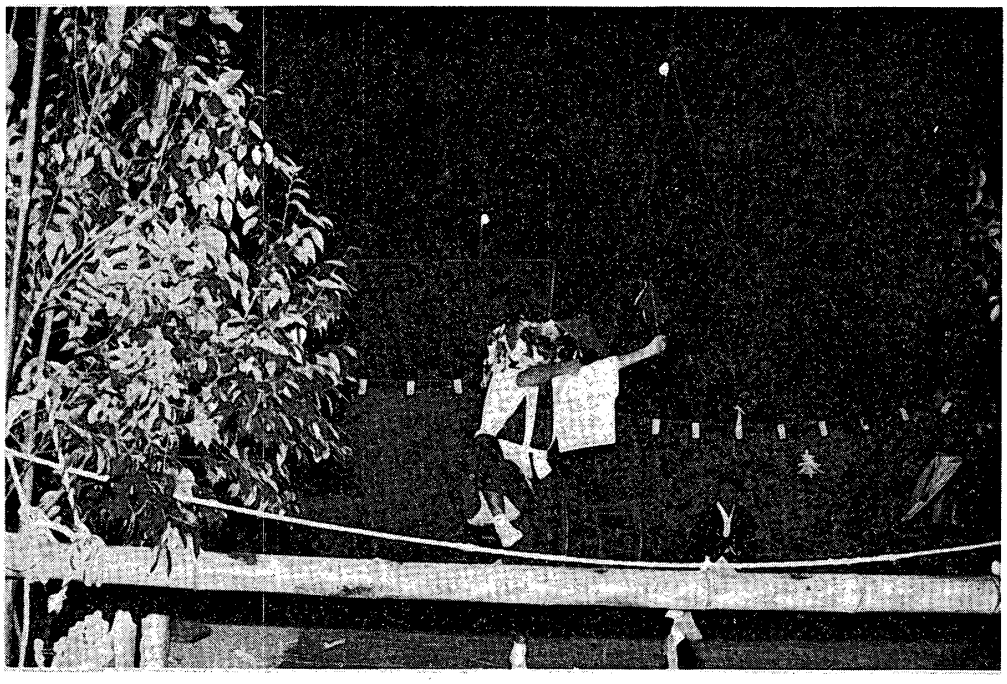
（写真４）

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College



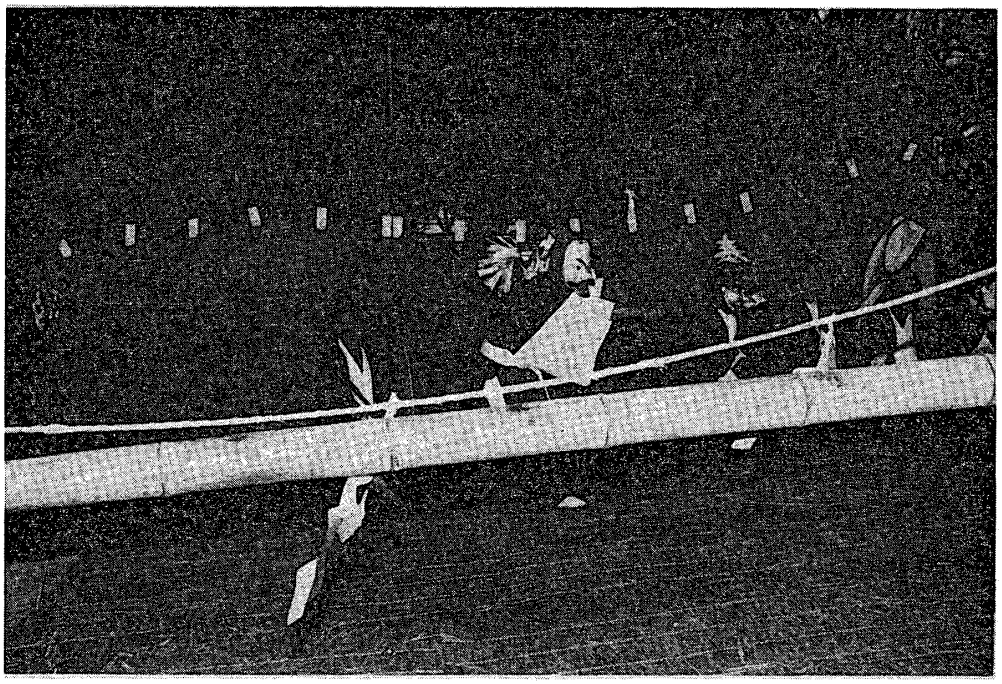
（写真５）



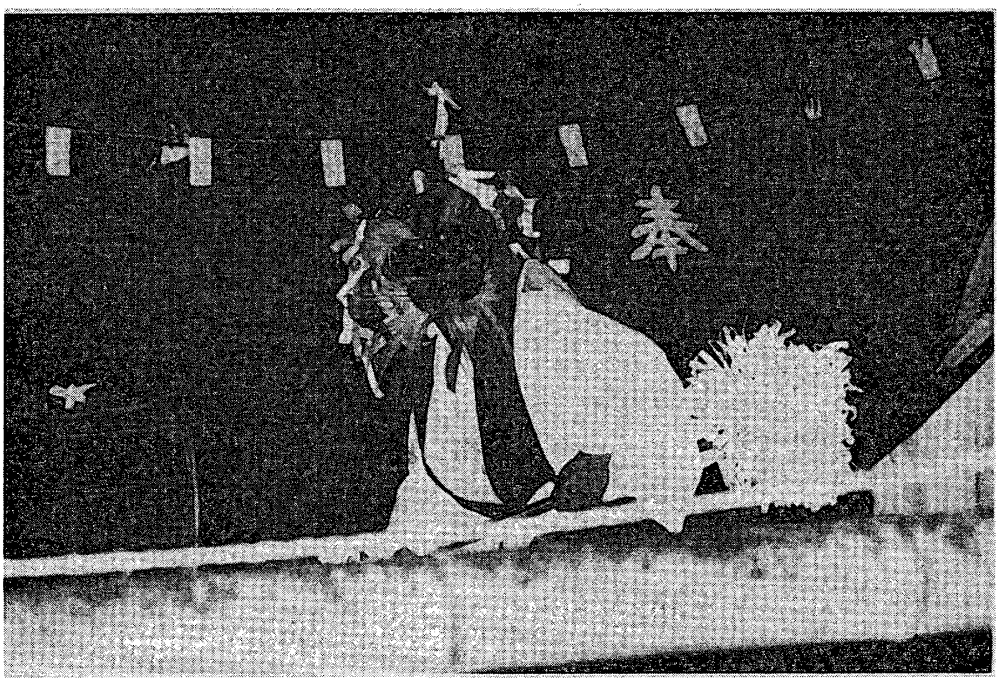
採物：三笠　（写真６）

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College



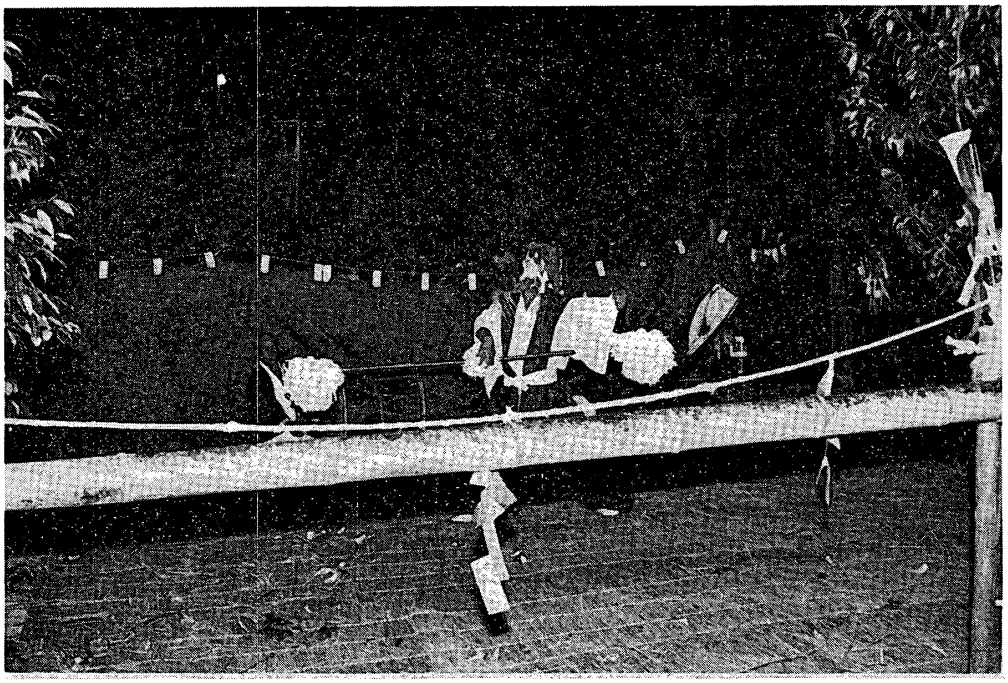
白面の鬼神　　關　開　　（写真７）



黒面の鬼神　　天狗面である　　（写真８）

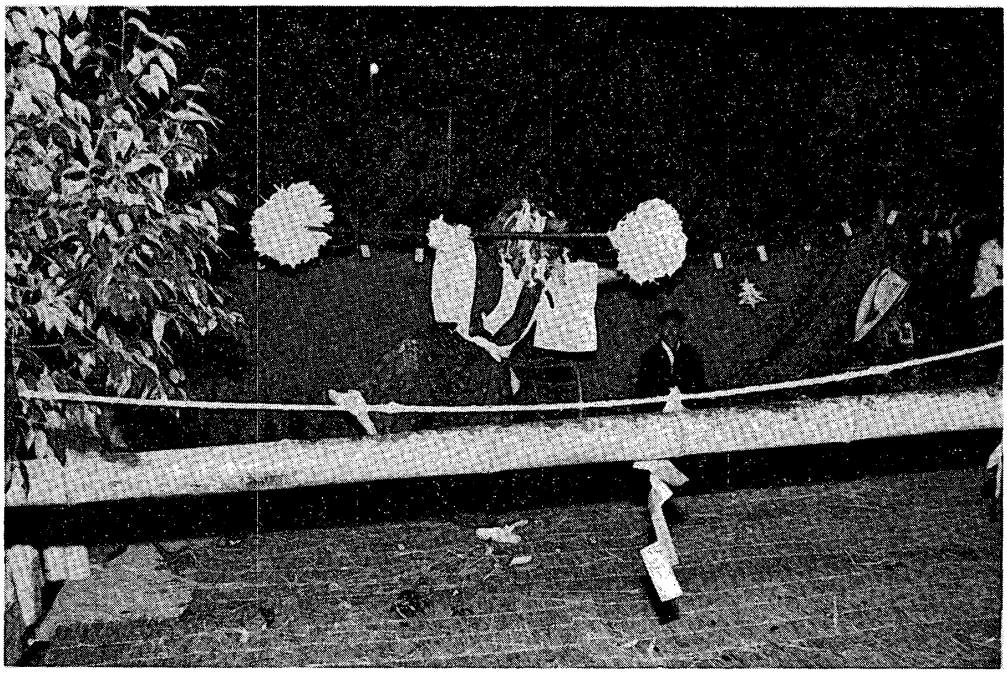
NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College



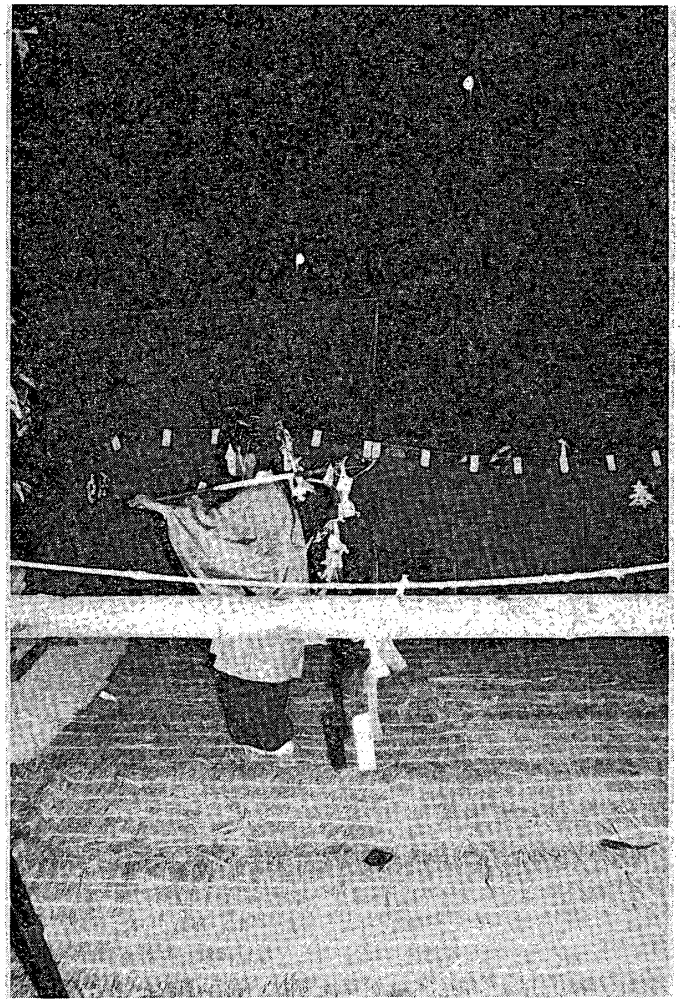
（写真９）

最も難しいとされる鬼神舞
足腰の強い粘りが必要とされる浮沈の激しい舞である



（写真10）

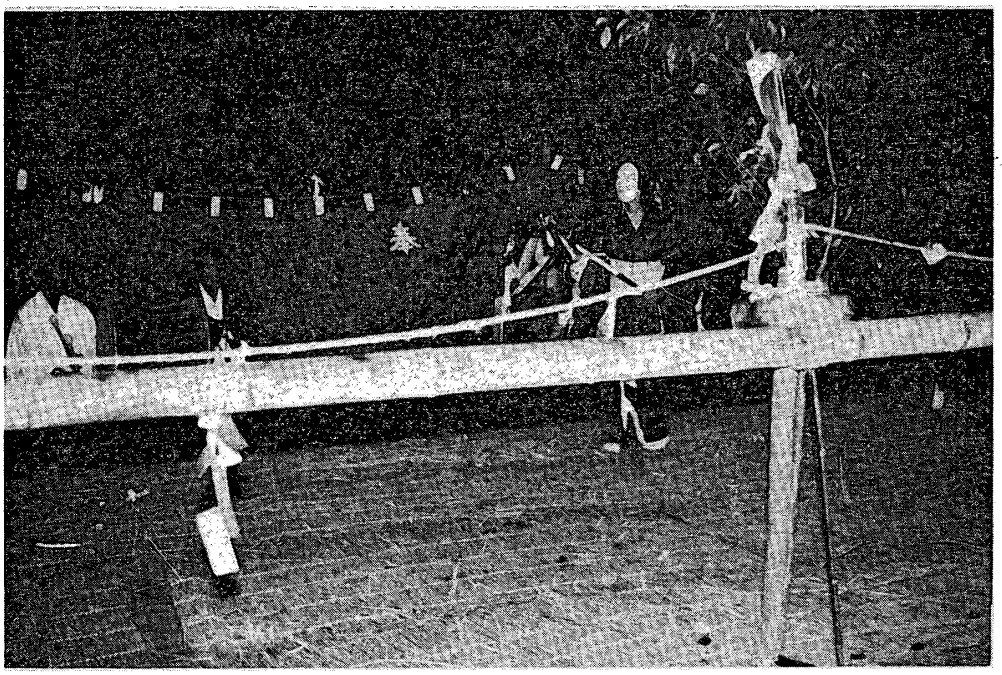
NII-Electronic Library Service



（写真11）

氏舞のリズムを使う舞

（写真12）　面白おかしく腰をふってゆるゆると舞う



NII-Electronic Library Service

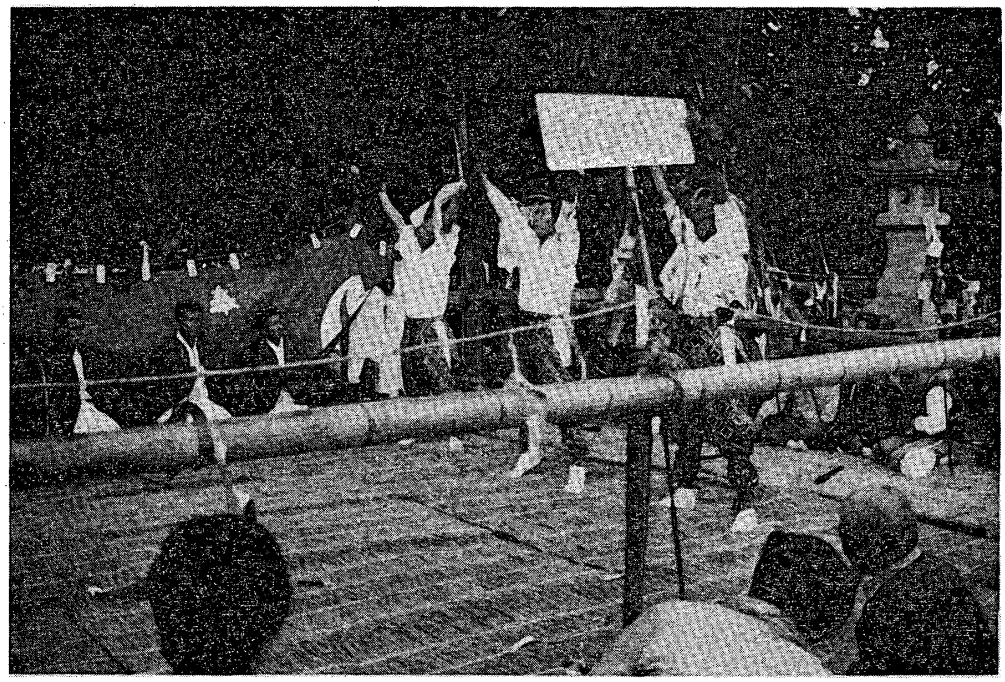
Miyazaki Women's Junior College

豊作祈願の舞　↑
田の神　腰にはザル、すりこぎ、弁当箱を下げている
（写真13）

（写真14）
杵　舞　杵の上に嫁女姿の者が乗る、アクロバティックなもの
↓　モチつきの所作を含む

NII-Electronic Library Service

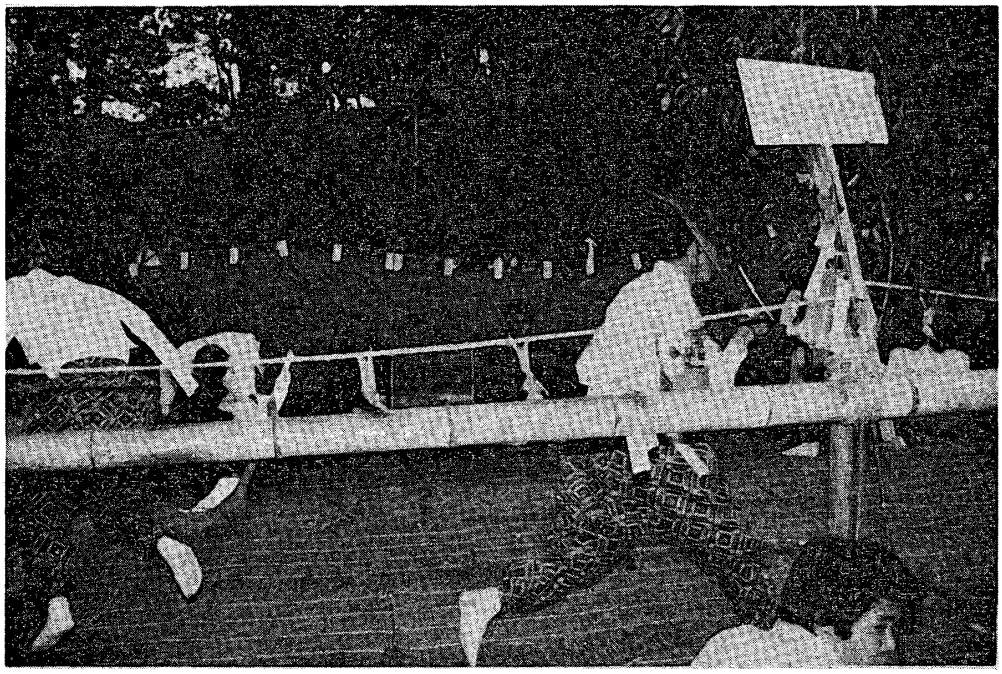
Miyazaki Women's Junior College



（写真15）

剣　舞

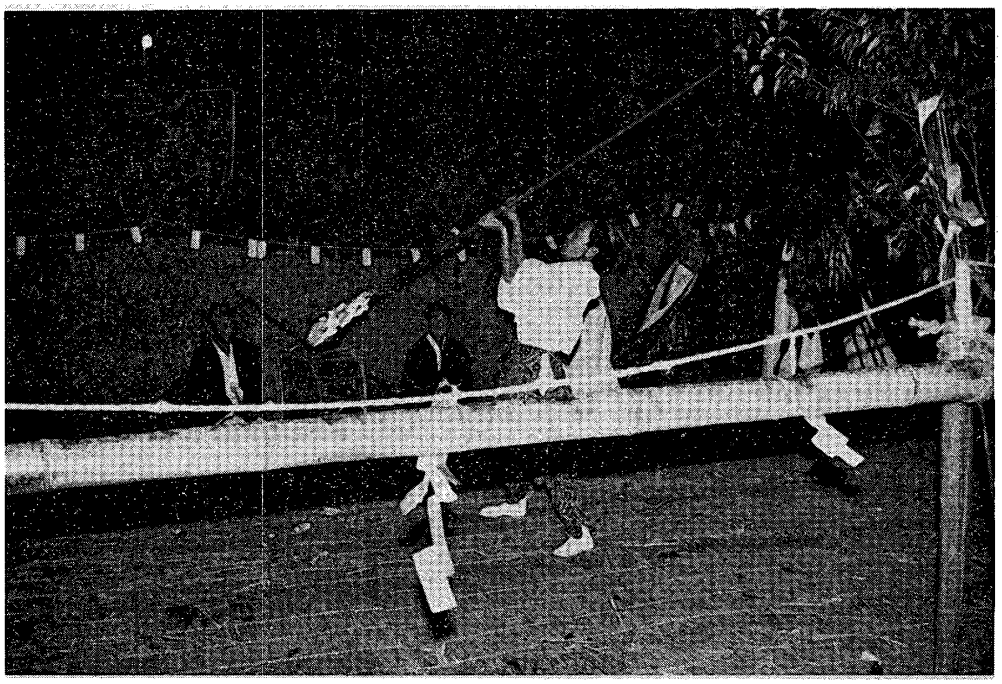
この激しい動作が独特の太鼓のリズムに乗って、次々と行われる



（写真16）

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College



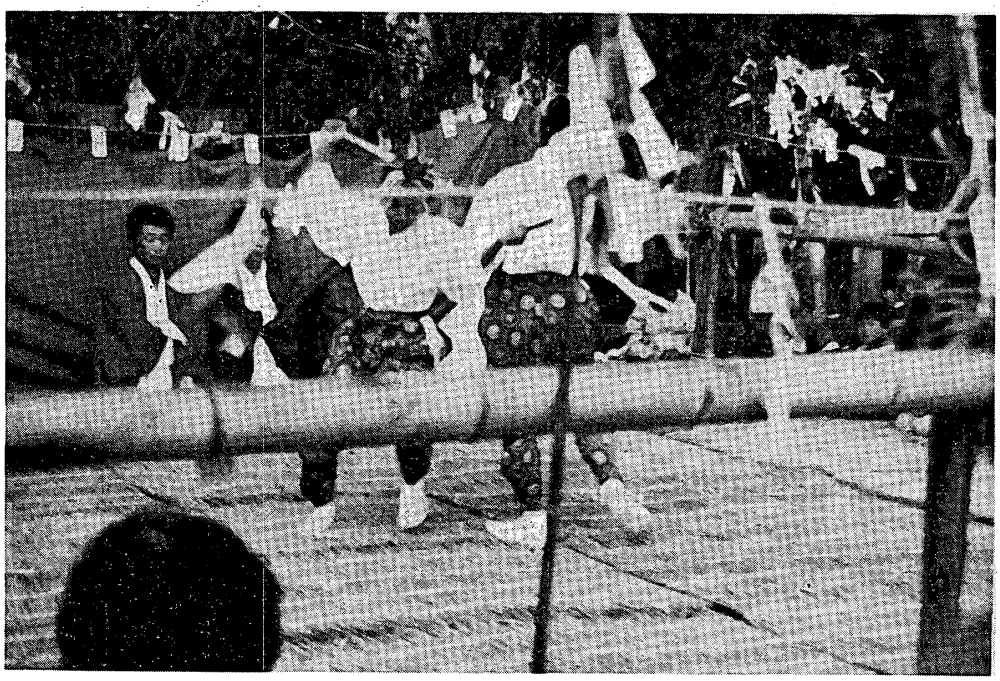
↑
なぎなた舞（なぎなたを回している所）

（写真17）

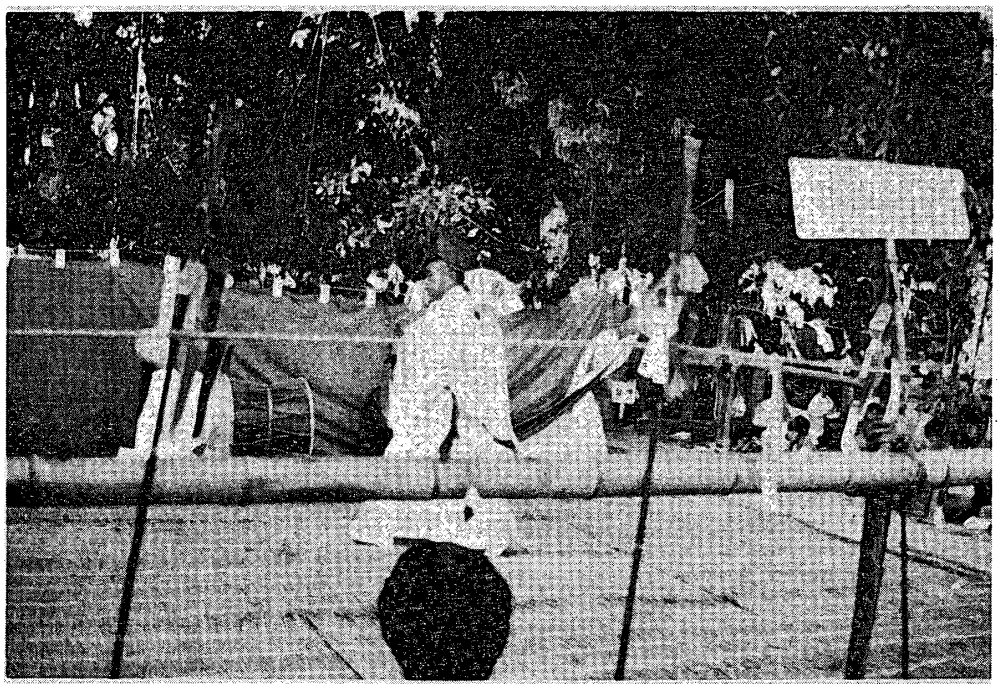
このようなアクロバティックな動作も数多く、独特のリズム型がある。

剣くぐりの動作
↓

（写真18）



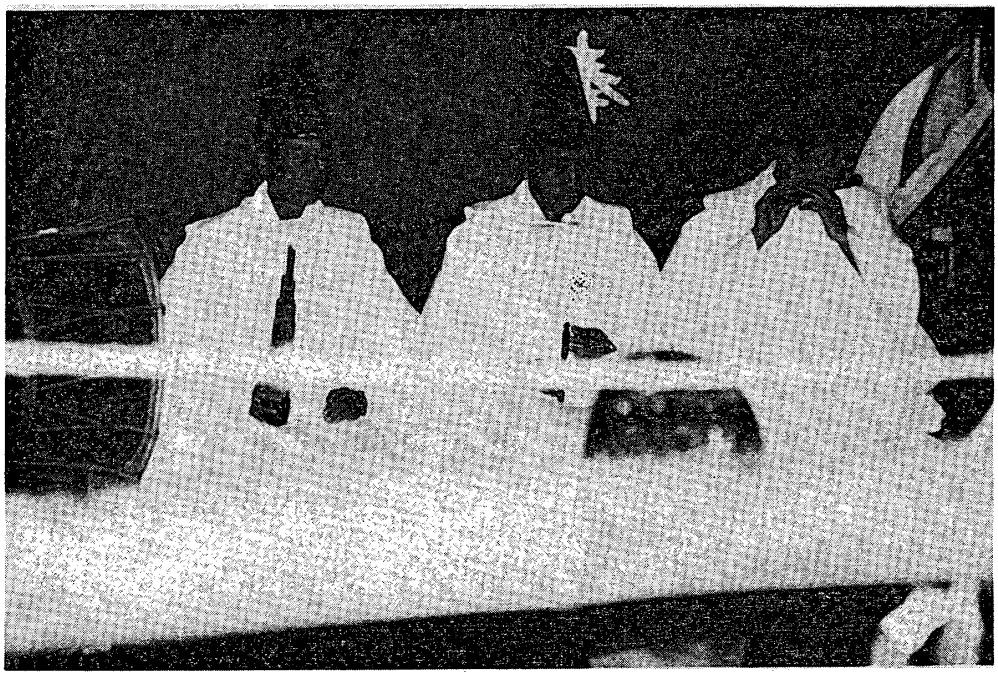
NII-Electronic Library Service



↑
神楽初めの清めの舞

(写真19)

↓ 神送りには雅楽「越天楽」を奏する。ただし三管のみで絃はない



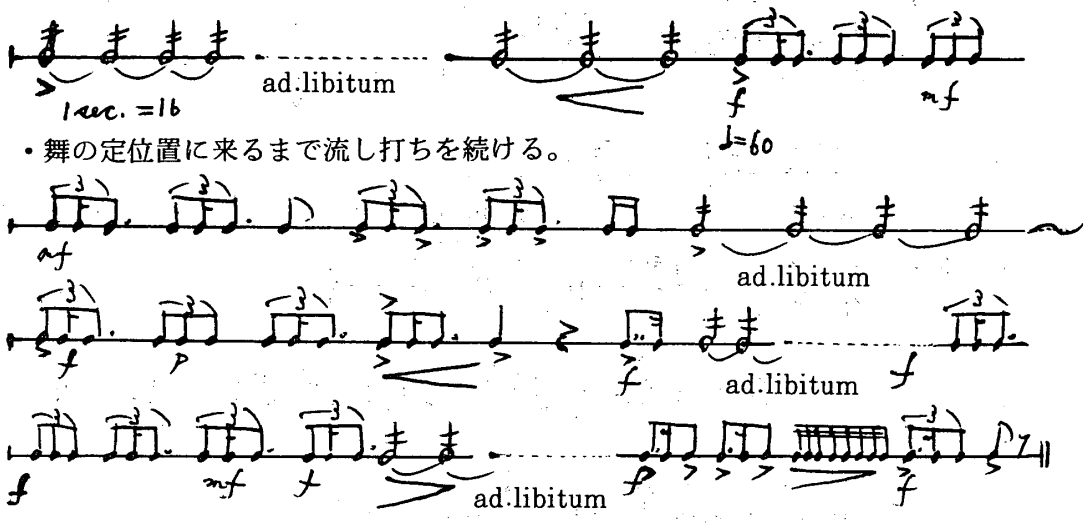
(写真20)

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

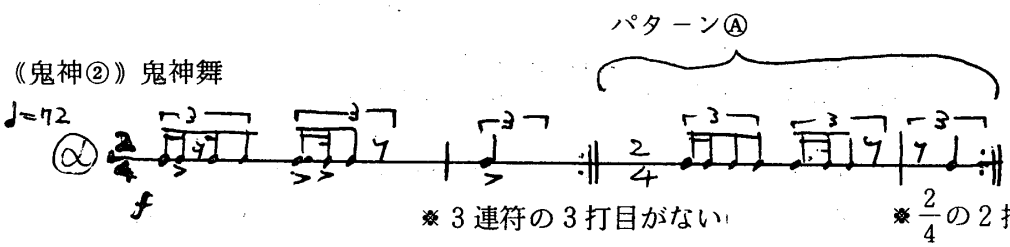
〔生目神楽の太鼓のパターン〕

(I) 《鬼神①》神の入りの代表パターン（ variation 多数あり）

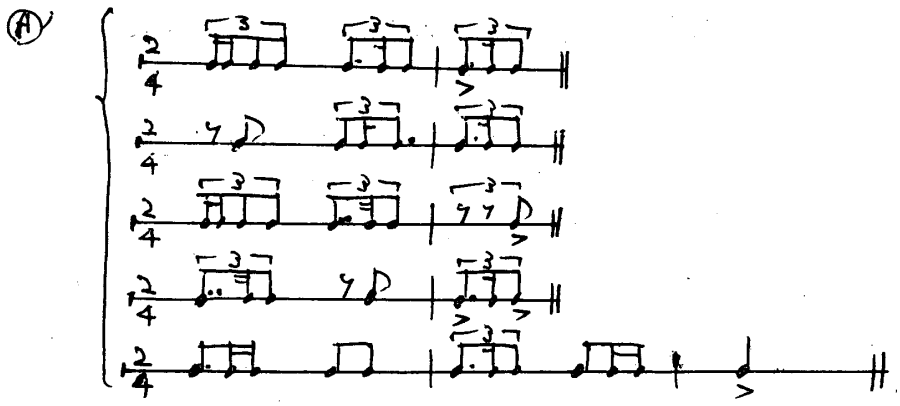


・舞の定位置に来るまで流し打ちを続ける。

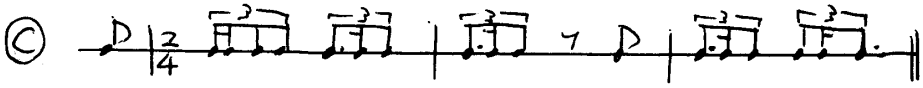
《鬼神②》鬼神舞



※３連符の３打目がない　※$\frac{2}{4}$の２拍めがない



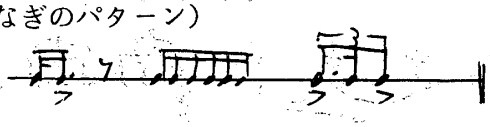
この他多数の variation として、Ⓐ'が存在する。
ここに挙げたものはその代表例である。



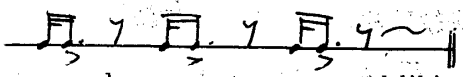
NII-Electronic Library Service

（鬼神舞）

Ⓑ（つなぎのパターン）

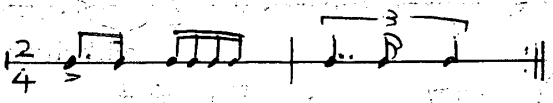


Ⓓ

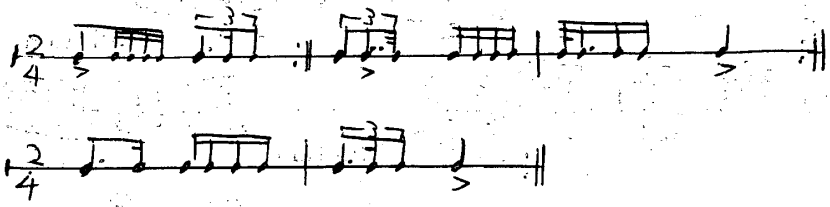


accel. ad.libitum

Ⓔ ♩=96



Ⓔ′



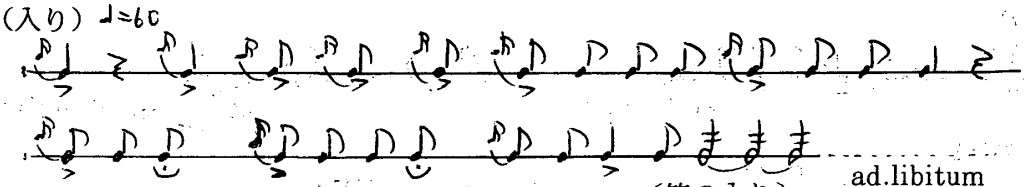
Ⓔ′は他に付点の長さ等の音価の変化が著しい variation が多数存在するので、代表的なもののみ記した。

〔鬼神舞〕は、ⓐから始まった後Ⓐ（Ⓐ′）Ⓒを何度も繰り返し、舞の切れ目でⒷからⒹへと移る。このⒶ（Ⓐ′）ⒸⒷⒹのくり返しにⒺ（Ⓔ′）が周期的に入り込んで後、再びⒶ（Ⓐ′）ⒸⒷⒹに戻る。

NII-Electronic Library Service

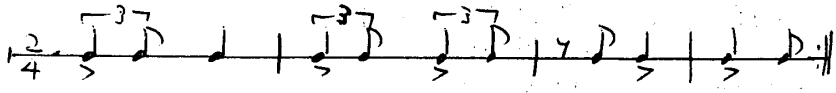
(II)　《うづめ舞または氏舞》…笛が入ってくるが、今回は記譜省略

（入り）♩=60



〔笛の入り〕
‖
女神の出

（女神舞）♩=60

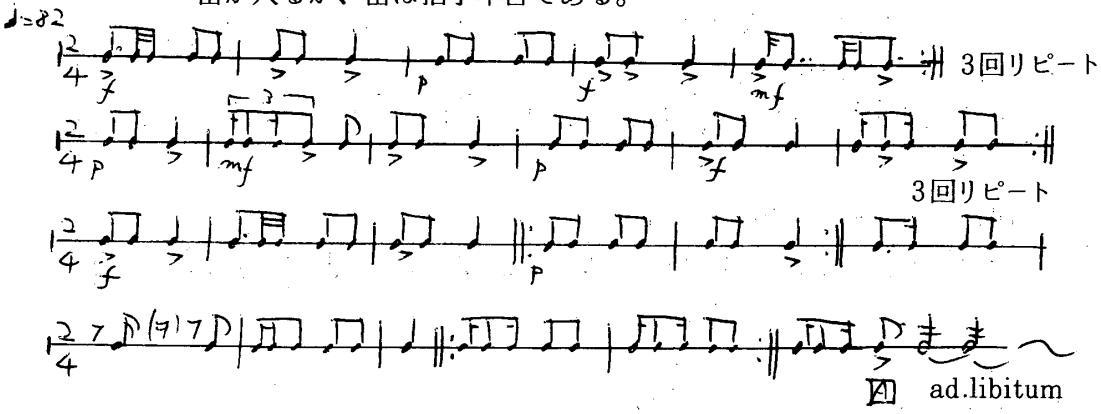


8分音符1拍なし

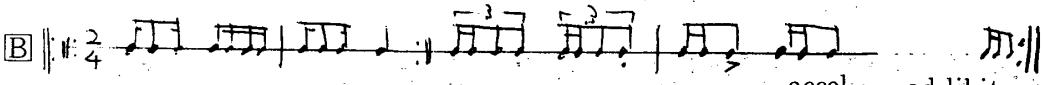
《うづめ舞》′　＝《田の神》

笛が入るが、笛は拍子不合である。

♩=82

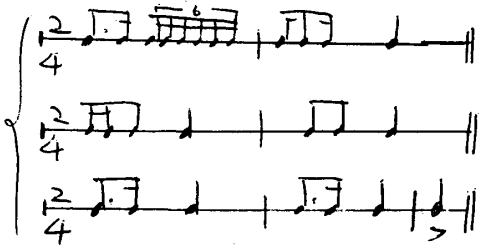


A 以降は下記のくり返し



（つなぎ）…Bのパターンのつなぎとしての代表例

Aのくり返しから B→《田の神》へのパターンである。

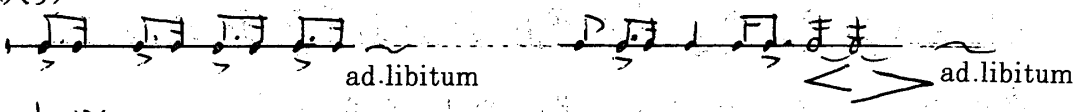


NII-Electronic Library Service

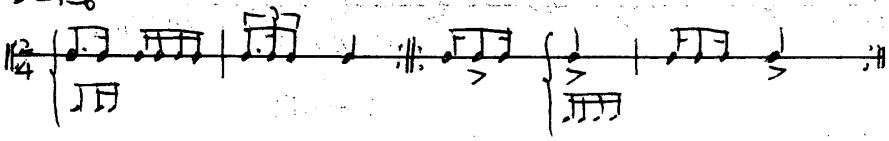
Miyazaki Women's Junior College

(Ⅲ) 《剣　舞》

（入り）

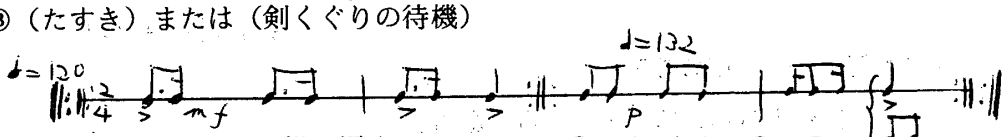


Ⓐ ♩=126



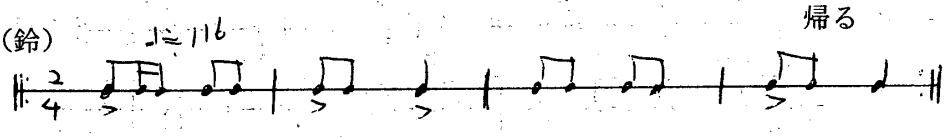
Ⓐをくり返して流し打ちに入り、適宜続けた後Ⓑに移る。
(ad.libitum)

Ⓑ（たすき）または（剣くぐりの待機）

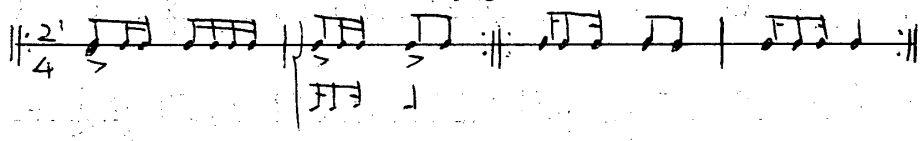


Ⓑ－①しばらく繰り返す　　Ⓑ－② すぐにⒷ－①に帰る

Ⓒ（鈴）



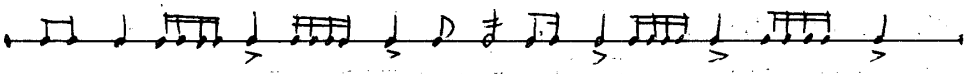
Ⓓ（剣）



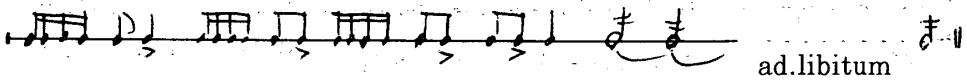
accel.　する

Ⓔ（なぎなた　つなぎ）　♩=60

①



②



NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

生目神楽の太鼓のパターン

(I) 鬼　　神
(II) うづめ舞
(III) 剣　　舞

(I)＝“荒ぶる神の舞”　2　鬼　神
4　三　笠
16　三笠荒神など

(II)＝狂言系の舞　7　氏　舞
32　田の神

ただし、鬼神舞の一部としても使われることがある。

(III)＝アクロバティックな舞

一人剣～四人剣
なぎなた舞
弓　　矢
杵　　舞

NII-Electronic Library Service